

## &lt;前回&gt;オリエンテーション

## 後期：古代キリスト教から中世、そして宗教改革

## オリエンテーション

- |                      |       |
|----------------------|-------|
| 1. ゲルマン民族とキリスト教      |       |
| 2. キリスト教修道制          | 10/13 |
| 3. 中世キリスト教世界のダイナミズム  | 10/20 |
| 4. キリストと文化——スコラ的文化総合 | 10/27 |
| 5. 自然神学の諸問題          | 11/10 |
| 6. 研究発表（角元）          | 11/17 |
| 7. 研究発表（金）           | 11/24 |
| 8. 研究発表（山本）          | 12/1  |
| 9. 研究発表（長岡）          | 12/8  |
| 10. イスラームと12世紀ルネサンス  | 12/15 |
| 11. フィオーレのヨアキムと歴史神学  | 12/22 |
| 12. 中世都市と民衆の宗教性      | 1/12  |
| 13. 宗教改革と近代世界        | 1/19  |

**1. ゲルマン民族とキリスト教**

## 1. コーマ帝国／ポスト・ローマ国家、小国家時代

民族移動後の数百年＝エトノス生成、流動性の高い集団から、民族と呼ばれる政治集団が創出

## 2. ゲルマン民族の移動の影響

古代の終焉、暗黒？

しかし、地域によっては、古代と中世の連続性は一定程度確保された。

アフリカでは、ローマ帝国の徴税制度が機能し続けた。

## 3. ゲルマン民族のキリスト教化

ゴート族はまずアレイオス派キリスト教を受け入れる。ウルフィラス(Ulfilas、c.311-383)

アレイオス派キリスト教とカトリックとの対立。

グレゴリウス一世は、ゲルマン諸民族のカトリック化の意義を認識していた（ゲルマン宣教構想）。ビザンティンからフランクへの転換。

## 4. ゲルマン後継国家において、「いわゆる「地方教会」(Landeskirche)を形成した」、「教皇権の発達に従って対立の度を加えたが、その対立はすでに中世初期にその端を發し、中世における政治抗争の因をなした」(567)

↓

西欧ラテン世界における教会的秩序の分析

## 5. 「ローマ教皇の東帝国およびビザンティン教会からの独立と、西方諸民族の精神的指導権の確立とである」、「レオー世」(554-555)、「レオー世以後のローマ教皇、殊にグレゴリウス一世はペテロの聖座の継承者として、地上における「キリストの代理者」(Vicarius Christi)の地位を占め」(565)。「ペテロ＝岩＝教会」という理念の成立の意義と問題。

## 2. キリスト教修道制

### (1) 修道制の源泉・起源

#### 1. ユダヤ教的伝統の再考：死海文書・クムラン教団(1947年)の発見

祈り、禁欲、共同生活、善悪二元論的傾向（終末論、プラトニズム）という諸特徴。  
洗礼者ヨハネの宗教集団

→ 初期キリスト教徒の関係、とくにエルサレム教会の使徒集団

#### 2. フィロンの著作（『瞑想的な生活について』）より

エジプトのエッセネ派、テラペウタイ（治療者？）

#### 3. 禁欲（アスケーゼ）の積極的意義

「福音のためなら、わたしはどんなことでもします。それは、わたしが福音に共にあずかる者となるためです。あなたがたは知らないのですか。競技場で走る者は皆走るけれども、賞を受けるのは一人だけです。あなたがたも賞を得るように走りなさい。競技をする人は皆、すべてに節制します。彼らは朽ちる冠を得るためにそうするのですが、わたしたちは、朽ちない冠を得るために節制するのです。だから、わたしとしては、やみくもに走ったりしないし、空を打つような拳闘もしません。むしろ、自分の体を打ちたたいて服従させます。それは、他の人々に宣教しておきながら、自分の方が失格者になってしまうためです。」（Iコリント、9.23-27）

#### 4. 宗教的生の形態としての修道

・独居と共住（孤独と交わりの相補性）

ギリシャ語のモナコス（ラテン語の *monachus* から近代語へ）＝「独りで住む者」

ラテン語の *anachoreta* ＝「隠れ住む者」

ラテン語の *eremita* ＝「荒野に独り住む者」 → 独住者、隠修士

*coenobion* ＝「共同生活」（独住者の集団） → 共住、修道院

エジプトのパコミオス(292/4-346)

古代においては、様々な形の修道生活が現れ混乱が生じる。異端視される放浪修道士、アウトロー的存在。

シリアの頭柱行者シメオン(c.389-459)

・使徒的生活（*via apostolica*）の理想

キリストの福音を宣べ伝えるために、キリストのように清貧を尊び、使徒たちのように共同生活を営む。

#### 5. 「祈りが終わると、一同の集まっていた場所が揺れ動き、皆、聖霊に満たされて、大胆に神の言葉を語りだした。信じた人々の群れは心も思いも一つにし、一人として持ち物を自分のものだと言う者はなく、すべてを共有していた。使徒たちは、大いなる力をもって主イエスの復活を証しし、皆、人々から非常に好意を持たれていた。信者の中には、一人も貧しい人がいなかった。土地や家を持っている人が皆、それを売っては代金を持ち寄り、使徒たちの足もとに置き、その金は必要に応じて、おのおのに分配されたからである。」（使徒言行録 4.32-35）

### (2) キリスト教修道制の歴史的展開——古代から中世へ

#### 6. エジプト

S.Ashina

エジプトのアントニウス(251-356)：キリスト教修道制の父  
 修道士の理想的模範としてのアントニウスの禁欲的生活  
 世俗を離れ砂漠で修養する隠修士（禁欲的行者）の散在的集団  
 アタナシウス(296-373)の作と言われる『聖アントニウス伝』  
 → アレイオス派の異端問題の文脈

↓

隠修士的形態から共住生活へ（パコミオス）  
 共同生活の規律とそれに対する服従、清貧  
 修道制は、パレスチナ（4世紀のエルサレムは「聖地」となり、聖地巡礼が始まる。  
 多くの修道院が建設。西方から、ヒエロニムスやルフィニウスらが訪れる）、シリア（シメオン）へ広がる。

#### 7. 東方修道制の伝統

カッパドキアのバシレイオス（-c.379、カエサリアの主教、カッパドキアの三教父の一人）：東方キリスト教の共住修道制の基礎を築く。三つの会則。

#### 8. 西方への修道制の展開

##### (0) アウグスティヌス

『カトリック教会の道徳』（創文社）

『アウグスティヌス会則』の「第二会則」における労働の規定（cf. 「第三会則」）

労働重視の思想：労働することを欲しない修道志願者に対して、労働の有益性を説く（『修道士の労働について』）。

祈り、説教、学問などに集中するために、労働の義務を免除されており、托鉢で食べ物を得るのが当然との論理（労働しない権利）に対して。パウロの模範。怠惰な放浪修道士の偽善的生活などによって、アフリカ管区における修道士の労働倫理は危機的状況であった。

##### (1) アイルランド、学者の島

5世紀におけるパトリック（アイルランドの守護聖人）のアイルランド伝道。

↓

6世紀より、修道制の発展。厳しい修行と学問の愛好。

ペレグリーナティオ（異郷滞在、異郷遍歴）：修道院長が修道院を突然譲り渡して、行き先も告げずに遠くに旅立つなどのパターン。魂の救いのために新しい故郷を求めるといふ贖罪的な意味を伴った禁欲的動機に基づく行為。

コルンバヌス（-615）のガリア伝道

『修道士規定』『共住生活規定』：アイルランド同様に厳格な会則。

↓

7世紀以降のガリアの修道院の発展。それに伴い（フランク王国の政治的統一と教会整備という新しい時代状況）、アイルランド系修道士の影は次第に薄れてゆく。

『ベネディクト会則』の普及。

##### (2) ドイツ

ドイツ人の使徒ボニファティウス(c.687-754)

フルダ修道院(744)、ベネディクト会則の採用。

- (3)ベネディクト会則とグレゴリオス1世(590-604、修道士から教皇になった初めての人物)

モンテカッシーノ修道院(525)＝ベネディクト修道会の設立。

『ベネディクト会則』(530/534、ただし原本は喪失)

修道生活の入門という意味。入門書としての優秀さ。

東方やアイルランドの修道制のように厳格な孤独な修行を要求せず、中庸の精神で生活し、労働や定住を義務づけることによって修道院の経済的自立を図り、共同体としての修道院の運営を機能的に組織化した。修道院の自律性を確保するとともに、西欧に形成されつつあった農村社会(世俗社会)に適應する。

↓

修道院の西欧的形態の確立。

- (4)クリュニー修道院(910-)

修道院の世俗化の進展に対する修道院改革運動(11世紀のグレゴリウス改革との関係は議論が分かれる)。『ベネディクト会則』の遵守。

第二代修道院長オドー(926-942)：教皇レオ七世の特許状によりクリュニーは教皇直属→991年には司教権を排除、修道院の強大な系列的組織化(修道会、第五代修道院長のオデロー)。

マリア崇拜(5世紀にビザンツで現れ、シリア、エジプトに普及、ローマには7世紀)、荘厳な典礼(音楽)

- (5)シトー会(1098-)：クリュニー派修道士の規律弛緩への批判。『ベネディクト会則』の厳格な遵守。清貧。クリュニーの中央集権的体制に比べ民主的な形態。『愛の憲章(カルタ・カリターティス)』

封建領主的諸収入の放棄、労働の重視(開墾)、経済的自立(修道院経済)。

額に汗する者こそが真の修道士であり、労働は神の栄光のため。

クレルヴォーのベルナルド(-1153)の説教活動、異端に対応(アンリ派の異端を調査し、正統信仰に引き戻す)

11世紀後半から12世紀にかけて、異端的民衆運動が西欧の各地に発生。一般の信徒集団の間にも、使徒的生活の理念が影響し、異端運動へと発展(教会の伝統的な教義や聖書解釈からの逸脱)。

「キリストの貧者」、「リヨンの貧者」、カタリ派、ヴァルドー派。

↓

アルビジョア十字軍

- (6)13世紀の托鉢修道会

民衆の宗教性のうねりに対応するために(都市、イスラーム)。

- ・ドミニコ会：弁舌と学問の修道士(異端の論駁、異端審問)、労働から学問へ、大学。
- ・フランシスコ会(小さな兄弟の修道会)：民衆の新しい宗教性を求める敬虔な運動を教會的秩序の内部に取り戻す。『第一会則』(1221年、マタイ19.21、マタイ10.9-

S.Ashina

10、マルコ8.34を三箇条とする。）、『1224年の会則』。清貧。

・カルメル会、アウグスティヌス会

10.

「もし完全になりたいのなら、行って持ち物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい。」

「帯の中に金貨も銀貨も銅貨も入れて行ってはならない。旅には袋も二枚の下着も、履物も杖も持って行ってはならない。働く者が食べ物を受けるのは当然である。」

「わたしの後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。」

### （3）修道制の諸問題

11. 使徒的生活とは何か。

労働、学問、説教

キリスト教的知識の担い手

司教／修道院／大学

↓

12. 地上を生きる信仰者。キリスト教徒はいかに生きるべきか。

13. 妥協・退廃と改革、この反復

王・貴族などの封建勢力による保護

社会的エリートであり続けるために。宗教的な模範となるために。

↓

終末を生きる

14. 宗教的生の普遍的現象・基本類型

個人と集団

集団的運動体の熱狂

個的経験の神秘的深み・敬虔さ → 近代世界へ

民衆の宗教性の問題

### <参考文献>

1. 堀米庸三『正統と異端——ヨーロッパ精神の底流』中公新書。
2. グルトマン『中世異端史』創文社。
3. 今野國雄『修道院』近藤出版社、『修道院——祈り・禁欲・労働の源流』岩波新書。
4. 朝倉文市『修道院』講談社現代新書。
5. 戸田 聡『基督教修道制の成立』創文社。
6. 竹田文彦「古代基督教修道士と聖書」（日本基督教学会『日本の神学』30、1991年、27-45頁）  
「シリア語版『アントニウスの生涯』——エジプト修道制とシリア原始修道制の一会合点」（日本基督教学会『日本の神学』39、2000年、43-67頁）
7. 久松英二『祈りの心身技法——十四世紀ビザンツのアトス静寂主義』京都大学出版会。
8. ボンヘッファー『共に生きる生活』新教出版社。